戦後50年で固まった建築を柔らかくする糸口

■ 内藤　廣氏（建築家）との議論から

戦後50年で硬直化した日本の建築

日本建築の歴史を振り返れば、明治時代はとにかく建物を建てたいというシンプルな希望があって、ヨーロッパの建築を模倣していきました。そのつぎに来たのが、余分な装飾を排した一種の機能主義の時代。ファシズムの時代を経て、戦後日本の時代には、とにかく国を立て直さなければならないということで、最低の費用で効率的に、しかもできるだけ機能を満足させる建築が進められました。この動きは、建築基準法、都市計画法、消防法など制度面での整備に結果としてつながることになりました。

これが軌道にのって、計画学*1というものが起こってきたのが、1960年代から70年代。建築をプロトタイプ化することにより、なるべく機能的にしていこうという動きです。機能を軸に予算化がされるので、発注形式としてはわかりやすい形がととのえられたと言ってもよいと思います。

反面、制度や機能にかんじがらめにされて、劇場といえばこういう形、博物館といえばこういう形というふうに、マニュアル化され固まってしまった。日本の建築は戦後５０年の間にこの仕組みの中で硬直化してきているといえるのではないかと思います。

マニュアル化した建築を計画することは簡単ですが、本当に利用者のため、あるいは地域のためになっているかというと疑問があります。建築というのは社会的資産として50年、100年というスパンを考えるべきものであって、目先のことだけを考えていると短いサイクルしかもたないのではないでしょうか。

全国的にホールや美術館が相当数できたのですから、これからはどこかに未来への破れ目をつくっておいて、将来のアート環境を育てることこそが重要で、それが本当の意味での生きた建築なのではないかと思います。

現場からトップへのフィードバック

今の建築の作られ方というのは、とかく上から下へと流れる仕組みになっています。資本主義社会の性質で、お金の流れる順番にヒエラルキーが出来ていて、その順番に意思決定がされると効率よく機能するという制度になっています。しかし、問題は、生み出された建築が十全のものかどうかということです。行政の上層がそのことを理解して、意思決定システムの中で情報が下から上へ還流するような流れをつくることが必要でしょう。それがないと時代遅れの、あるいは世の

＊1　人間の生活・行動・意識と、空間との対応関係を基にして建築を計画するアプローチ

中の価値から取り残されるような建物がどんどん出来上がってしまうことになると思います。

現場からフィードバックするシステムを作るにはどうすれば良いのでしょうか。いまの仕組みは、たとえば最初こんなものが必要だということでニーズの組み上げがあって、機能が決まってしまいます。次に、ほかの自治体、施設と比較して規模や坪単価の大ざっぱな予算が決まります。最後にだれに設計を頼もうということで初めて建築家が出てきます。建築家は与件にしたがって設計し、行政官は正確に予算執行を行うという流れです。

予算を執行の前にもう一度、現場からトップにフィードバックして、クライアント側が本当にこれでいいのか議論することが必要だと思います。議会や予算の単年度執行といった行政制度上の問題はあるかも知れませんが、もう少し柔らかいシステムにできないでしょうか。

固まった機能をほどく

＊2　資料編参照

最近、どうも単体の美術館とか博物館の時代は終わりかけているのではないかと感じています。どういうことかと言えば、施設がたとえば美術館なら、ギャラリーといった単体の機能だけではなくて、図書館とか研究所などの性格を合わせ持った複合的な機能を備えているというようなこと。これは行政も直感的に感じていることだと思います。たとえば、熊本県牛深市のうしぶか海彩館*2というところは、地場産業振興センターのようでもあり、水族館のようでもある。そうかと思うと、魚を料理して食べさせるというような物産センターのようなものもあり、漁労用具とか漁の歴史など博物館的機能も持たせようとしています。

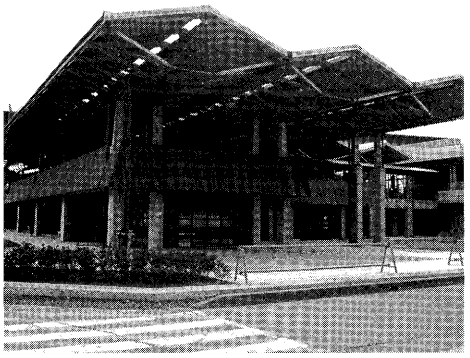
写真上：海の博物館
展示棟A（左）
展示棟B（右）
収蔵庫（奥）

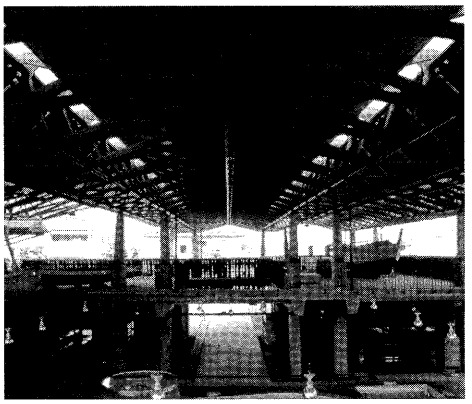
写真下：海の博物館
展示棟A内部

これは、実はその３分の１ぐらいは建築家の私から提案をして、何が街のためになるかを議論をしながら、すこしづつ機能をほどいていった結果です。これでもまだまだ足りないし、もっと本質的にほどいていかなければならないと思っています。

これまでの話を少しわかりやすく説明したいと思います。たとえば住宅金融公庫でお金を借りて家を建てるようとすると「キッチンはどこですか、寝室はどこですか、お手洗いはどこですか」と聞かれます。わたしは、お手洗いで新聞を読む人がいてもいいと思うし、お風呂場で読書する人がいてもいい、リビ

ングで寝る人がいてもいいと思います。しかし、住宅金融公庫で「借ります」といった途端にきっちりとしたリビングがないといけないし、寝室がないといけないといったような制度的な枠組みにはめられてしまう。その瞬間に、ある種住宅といったものが固まってしまう。そうではなくて住むための本来的な話から機能というものをどう見直せるかということを申し上げたいわけです。





写真上：うしぶか海彩館

写真下：うしぶか海彩館（内部）

フリートーク

現場からトップへのフィードバックを妨げている要因は何でしょうか。

フィードバックする時間的ゆとりがないことが一番の理由です。設計期間が長ければ、ここはもう１回やり直してみようとか再考できるけれど、例えば単年度予算で３月までに承認を得なければならないとすると、この手続きは12月議会でというように、行政手続きの関係で設計期間が短くなる傾向があります。建築というのは、本来長いスパンで設計されるべきなのに、どうしても間に合わないからということで、フィードバックする時間が持てないわけです。

立派な建物は建てたけど、管理にお金が掛かりすぎるといったことがありますが、どのように考えたらよいのでしょうか。

最近バンコクに行った際、感じたことですが、赤道直下の国でガラス張りの高層建築をどんどん建てています。もしオイルショックが来たらどうするのでしょうか。何かおかしい。社会資産ということを考えるのであれば、そういうところまで踏み込んで機能するようなものを建てなければいけないと思います。建築というものを建ち上げることよりも、建ち上がった建築をどう生き長らえさせるかが重要なテーマになってきていると思います。

建築を設計する場合、部材の性能はＪＩＳ規格に制約されているわけですが、1960年代に出来た基準というのはスクラップ・アンド・ビルドでを前提に作られています。いざ寿命の長いものをつくろうとすると、われわれの手元には耐久的な材料がないことに気づきます。こうしたことも根本から見直していかなくてはならないのではないか、と思います。

財政の問題を言えば、10年で寿命が尽きる材料があるなら、きちんとメンテナンスをする費用をみなければいけないのに、それがなかなかできない。メンテナンス費用がかかること自体が問題なのではない。必要ならば費用

を惜しんではならない。そこで問題なのは、そうした維持管理が利用者の効用との関係で正当化できるのか、それとも維持管理費用がかからない建築をするべきなのか。

その辺の議論がまったくされていないこと自体が問題です。ともかく竣工が最終目標だから、過剰設備になっていて、毎年多額の維持費用がかかるというケースが多いのではないかと思います。建物には、ＬＣＣ（ライフ・サイクル・コスト）というのがあって、たとえばスチール部材だったら何年後に全部塗装をし直すとか、空調機械はこの時期に駄目になるから幾らかかります、といった具合に一覧表を打ち出す手法もあります。これを見て、クライアントがこんなには費用を出せないといった場合には、仕様変更を行うことができます。

建物自体が持つ価値と、建物の機能との関係についてどのようにお考えでしょうか。

建築家の個性が出すぎると文化的寿命が短い建物になる傾向があります。商業施設がよい例で、出来たときは目を引くけれど、時間とともに価値的減衰を起こす。逆に公共建築というのは時間とともに価値が出てくるというのが理想で、取り壊すときに反対運動がおきるくらいでちょうどいいわけです。
建物の価値と機能の関係を考えると、ふたつのことが言えます。ひとつは、建物自体の価値というのがある。たとえば昔の倉庫が美術館となったりする例もあります。その場合、建物単体に価値というのがあるわけで、本来建築に備わった機能とは無関係のそうした価値を担保することも重要なことなのではないかと思います。もうひとつは、機能的な面からできるだけ間口を広げておくということです。劇場を美術館にもできるようにしておくとか、なるべく多用途に対応できるようにするのが大切ではないでしょうか。

●内藤　廣
1950年　神奈川県生まれ
1974年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1974年～76年　同大学大学院にて吉阪隆正に師事
1976年　同大学大学院修了
1976年～78年　マドリットのフェルナンド・イーゲフス建築設計事所
1979年～81年　菊竹清訓建築設計事務所
1981年　内藤廣建築設計事務所設立

●主な作品
「ギャラリーTOM」（1984年）
「住居NO.1共生住居」（1984年）
「住居NO.8稜線の家」（1990年）
「オートポリス・アート・ミュージアム」（1991年）
「海の博物館」（1992年）
「志摩museum」（1993年）

●主な受賞
芸術選奨文部大臣新人賞（1993年）
日本建築学会賞（1993年）
吉田五十八賞（1993年）